

## 研究主題

### 「社会のありようと向き合い、考え抜く子供の育成—『考え抜く』質を高める社会科授業づくり—」

#### 1 研究主題について

##### (1) 研究総論との関連

昨年度より、本校は研究主題「ともに学び、学び抜く子供—非認知能力に注目した授業を通して—」を掲げて研究を始めた。主題に示す「目指す子供」像の具体化に向け、「非認知能力」、特に「意欲」と「粘り強さ」に注目して、それらに働きかける授業づくりを各教科で研究している。本校社会科では、引き続き研究総論との関連を図りつつ、社会科の授業づくりにおいて、子供たちの「意欲」や「粘り強さ」に働きかける具体的な手立てを考えていくとともに、それらが両者の発現や向上にどのようにつながるのかについて追究していく。

##### (2) 社会科で考える「ともに学び、学び抜く子供」の姿について

#### 社会のありようと向き合い、考え抜く子供

本校社会科では、研究主題に、「社会科で考える『学び抜く子供』の姿」を位置付け、3か年の研究において目指す子供像として表現する。

「社会のありようと向き合う」とは、子供が、学習する社会的事象やそれに関係する社会のありようを知ること、それらについてどの程度知っているのかをつかむこと、また自分がそのような社会とどのように関わっているのかを把握することから始まると考える。「知る」ことで「知らない」ことへの「問い」が生まれ、考えていく素地がつけられる。同時に、そのような「問い」は、対象となる社会的事象に向き合う方向性（「どのように考えていくか」、「どのような視点や立場から捉えていくか」）を表すものになる。このような学習対象について自分の既有知識の有無や立場を確認し、進んで「問い」をもととする姿や、「問い」を解決していくための見通しを立てようとする姿を「向き合う」姿と定義し、社会科授業において「意欲」をもって、または高めて学習に臨む様子と捉える。

「考え抜く」とは、「向き合う」ことによって生成された問いを、自ら立てた解決の見通しをもとに追究しながら、他者との関わりを通して考えを深めたり新たな問いを見出したりする姿、今後の社会の在り方を吟味判断したりする姿を表現している。子供自身が自らの考えをアップデートしたり、既習事項を活用して吟味判断したりすることは、社会科学習を通して学習対象と「向き合い」続けることによって可能になるものであり、社会科授業において「粘り強さ」を発揮して学習に臨む様子と捉える。

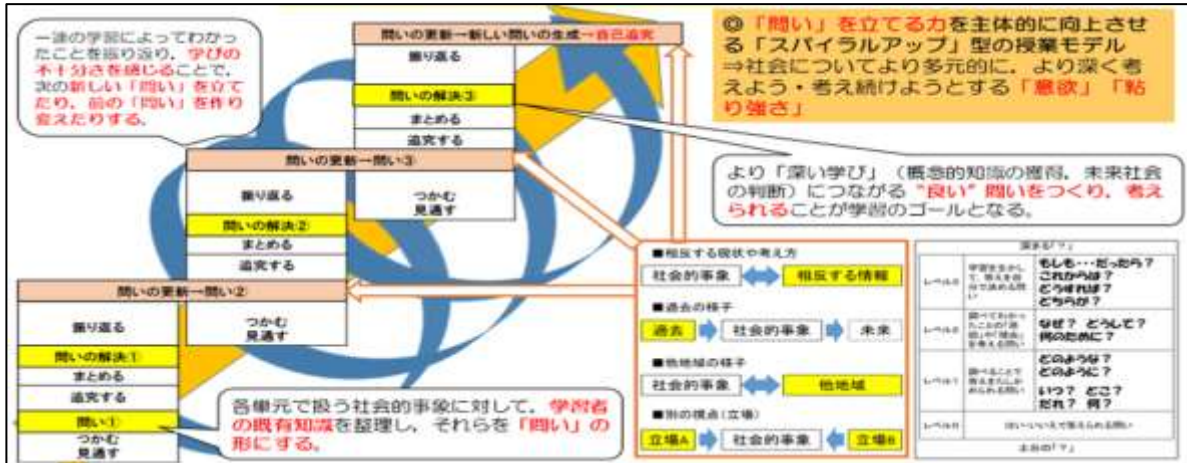
##### (3) 昨年度研究の成果・課題と研究副題との関連

#### 「考え抜く」質を高める社会科授業づくり

昨年度（研究第一年次）は、「『問いの更新』を繰り返す社会科授業づくり」を研究副題に据え、研究を進めた。学習者側の活動に依った視点での柔軟な授業づくりに挑戦することにより、一人でも多くの子供たちが「意欲」や「粘り強さ」をもって学習に取り組み、より主体的に「社会のありようと向き合い、考え抜く」経験を重ねることで、最終的には「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎」を培っていくことができるのではないか、との考えに立ち、「問

い」を立てる力を主体的に向上させる「スパイラルアップ」型の授業モデル（図1）を提案した。第一年次の研究・実践を終えて、成果と課題を表1に整理する。

図1 「『問いの更新』を繰り返す社会科授業づくり」のモデル【神戸作成】



<p><b>成果</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子供の素直な疑問を幅広く受け入れ学習計画を立てることで、ごく自然な形で学習者中心の授業づくりにつながった。</li> <li>○問いを「つくる」・「つくり直す」ことを継続することで、子供が「社会的事象をどのような点から見て、考えていけばよいのか」を学び続けることができた。結果として、それらが具体的な疑問詞として表現され、問いの質の向上につながった。</li> <li>○問いの段階性を明確にしてきたことで、それをもとに問いをつくる子供が出てきた。結果として、単元学習の方向性のある程度導入段階で共有することができるようになってきた。</li> </ul>
<p><b>課題</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①「問いの更新」に対して、学習の途中に細かな「問い」が新しく生まれることは多くても、単元学習中に認識や思考を深めたり、学習後も問い続けたりするようなレベルの問いがなかなか表出されなかった。</li> <li>②問いを積極的につくることはできるが、それを自分で解決しようとする活動に結び付けることができず、最終的に受け身の学習に留まる子供も多かった。</li> </ul>

表1 本校社会科研究第一年次の成果と課題【神戸作成】

研究第一年次を振り返り要約すると、子供一人一人の「問い」をより丁寧に扱う授業づくりにより、子供たちが対象となる社会（社会的事象）を、どのように見たり考えたりすれば（どのようなポイントで疑問をもてば）課題解決への道をつくることのできるのかという、いわば社会科学習の「学び方」を身に付け、向上させることができたと考えている。

一方で、「そのような視点でつくればいいんだ」と生み出した問いは、子供たちにとって、必ずしも自分自身が「解決したい」と思う問いとは限らないということが推察できる。「問いを考えよう」と言われたから、既習の経験を生かして「考えてみた」問いは、一単元の学習を形づくる重要な視点として機能するものの、個人にとってはどこか「他人事」で、最終的に自分で調べよう・深めよう・問い続けようという意識や姿勢には結び付きにくい。また、子供の素直な疑問を幅広く受け入れ学習計画を立てることを重視し、ある社会的事象や「教材」そのものに対して「問い」をもたせてきた一方で、「問い」を解決するために必要な問いをもつ機会を十分に設定することができなかつた。理想とする「問い＝学習問題」をあえて定めないという授業づくりは、導入段階のハードルを下げ、授業者側が子供に合わせて柔軟な学習計画を構築することができた。その反面、「ゴール」を明確に定めなかつた分、「どこまでを学ばよいか」

そのために「何を学ぶ必要があるのか」が不明瞭になり、学習途中で新しくつくられる「問い」は一貫性や関連性に欠けるものが多く、自力解決の機会を保障しきれなかったことも課題につながっているのではと考える。「考え抜く」質や主体性等には大きく課題を残したと言えよう。

以上のことから、今年度（研究第二年次）を、前述の課題の解決をねらう研究と位置付け、研究副題を「『考え抜く』質を高める社会科授業づくり」と変更して臨むこととする。

## 2 研究内容（二年次）

### ①「向き合う」学習（単元導入時）の工夫

- 「考えるべき問題」（＝学習問題）を授業者が提示する学習スタイル
- 「考えるべき問題」となる教材及び提示の仕方の工夫
- 「考えるべき問題」を解決する見通しを立てる活動の設定

### ②「考え抜く」ための協働的な学習の工夫

- ねらいを明確にした協働的な学習場面の設定と指導計画への明示
  - ①追究段階で得た情報の共有，それをもとにした考えの更新・深化 <共有>
  - ②追究の方法（何を活用して情報を集めるか）や方略（その方法でどのように情報を集めるか）の共有，それをもとにした学び方の調整 <調整>
  - ③多様な視点や価値観にふれるための「議論」の場の設定，それをもとにした吟味・判断 <議論>
- ICT，思考ツールの有効活用（思考の可視化・資料や記録の共有化）

### ③学び方を見直し，生かしていく「振り返り」の工夫

- 学習問題と解決の見通し，追究の仕方を評価する「振り返りシート」  
→「この単元をもう一度学ぶとしたら・・・」（問いはどうでしたか。／どのような問いを考えたいですか。／どのように学習を進めたいですか。 など

内容①について，昨年度は，「学習問題を最初に定めない」という「向き合う」学習の型を提案した。それに対して今年度の研究では，「学習問題を授業者が提示する」という型に変えて授業をつくってみようと思う（図2）。昨年度研究の背景には，一見従来の学習過程の型とは真逆のアプローチではあるものの，最終的には，従来の問題解決型の学習過程の中で，スムーズに，「良質な問い」を立てることができることにつなげたいという思いがあった。また，そのような授業づくりは，「ゴール」を明確に定めなかった分，「どこまでを学ばよいか」そのために「何を学ぶ必要があるのか」が子供にとって不明瞭になるという課題も残し，再度「学習問題」の重要性を実感した。しかしながら，日々の実践を通し，社会の本質に迫ることができるような「解決すべき問い（＝学習問題）」を子供たちと設定する学習活動と，小学校段階の子供たちの興味関心から生まれる「解決したい問い」とを結び付けることは極めて困難であること，改めてそのような活動の必要性を問うべきではないかと考えるに至った。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』第1章2の（1）の（ii）社会科，地理歴史科，公民科の具体的な改善事項内にある「主体的な学び」に関する文言には，

主体的な学びについては，児童生徒が学習課題を把握しその解決への見通しを持つことが必要である。そのためには，単元などを通じた学習過程の中で動機付けや方向付けを重視するとともに，学習内容・活動に応じた振り返りの場面を設定し，児童生徒の表現を促すようにすることなどが重要である。（フォント変更・波線は神戸）

と示されている。また，「教科の目標」は次の通り設定されている。

社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，グローバル化する国際社会を主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。（フォント変更・波線は神戸）

つまり、社会科の学習において必要なことは、子供たちが課題を「把握する」、「解決への見通しをもつ」、「追究したり解決したりする」ことであり、必ずしも課題を「つくる」ことは求められていないのではないだろうか。「主体的」、「自分事」といった言葉が一人歩きし、「子供が」「子供の言葉で」課題をつくることを授業者側が絶対視していたのではないか。重要なのはその部分ではなく、目の前に出された課題を「考えるべき」と感じ（課題把握）、「どのようにして考えていけばよいのか」、「何を学ぶことで解決することができるか」を自分で考えながら学び（課題追究）、自分なりの答えをもつ（課題解決）ことではないだろうか。

以上より、今年度は、「学習問題」を「考えるべき問題」と名付け、問題の内容だけでなく、その問題をつかませるための資料や、子供が「考えるべき」と感じられるような提示の仕方も含めた工夫を授業づくりの研究の軸とする。導入段階では「考えるべき問題を解決するためには、どのようなポイントで学習を進めるとよいか」、追究途中では「考えるべき問題の解決につなげられると思ったことはあるか」や「考えるべき問題を解決するために、他のポイントでの学習を付け足すべきか」といった発問をとり入れ、常に「ゴール」を意識した問いを考えることで、解決する「必要感」をもたせ、「考え抜く」質を向上させることをねらう。

内容②について、調査活動の場面を個人学習に充て、問題について自分で解決しようと資料を集めてまとめたり考えたりする学習の機会を設ける。同時に、個人学習によって集められた情報を共有したり、個人学習の方法や方略を学び合ったりすること、「議論」の場において追究したことをもとに課題について話し合い、多様な視点や価値観にふれることをねらう協働的な学習場面を要所に入れた単元学習を計画する。子供が自身の関心をもとに学習を進めつつ、他者との情報の共有や意見の交流から、理解や思考、学び方を更新・深化させていく経験を積ませたい。このような授業づくりの大きな力となるのが、ICTや思考ツールであろう。それらの効果的な活用についても、昨年度以上に考え、実践していきたい。

内容③について、一時間ごとに学習内容の振り返り（「本時の学習で重要だと思ったこと、学習問題の解決につながったこと何ですか。」）を行う一方で、一単元ごとに学習内容や学習方法の振り返り（「この単元をもう一度学ぶとしたら・・・。」）を行い、学習問題と解決の見通し、追究の仕方などを自己評価させる。子供たちが自分の学び方を見直し、後に生かすことを積み重ねることにより、社会のありようと向き合い、考え抜く質を高めていけるようにしたい。

図2 令和5年度研究 「考え抜く」質を高める社会科授業づくりのイメージ【神戸作成】



〈引用文献・参考文献〉

- ・文部科学省(2018)『小学校学習指導要領解説 社会編』 ・樋口万太郎 (2020)『子どもの問いから始まる授業!』, 学陽書房
- ・北俊夫 (2018)『「主体的・対話的で深い学び」を実現する社会科授業づくり』, 明治図書 ・奈須正裕 (2021)『個別最適な学びと協働的な学び』, 東洋館出版社
- ・佐々木潤 (2022)『個別最適な学び×協働的な学び×ICT入門』, 明治図書 ・木村明憲 (2023)『自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践』, 明治図書